

公教育を問う

第5部 国語力の課題

4

「祇園精舎の鐘の聲 諸行は無常の響きあり 沙羅双樹の花の色 盛者必衰の理をあらわす」

は女性教諭の声に続けてスラスラと音読、元気な声が室内に響き渡った。落ち着きのな

「一通り読み終えろと、今度は『竹取物語』だ。教諭は読み聞かせしながら、物語のキーワードを書いた漢字のカードを白板に張りつけていく。

「4歳児が集まるは『平家物語』の文章が張り出された。漢字仮名交じり文で振り仮名はないが、約30人の園児ら



漢字カードを使った幼稚園の授業
千葉県我孫子市の布佐台幼稚園

幼少期の親しみ「必要」

「命」「結婚」「玉」「宝物」「不思議」…。読み終えたときには、カードは20枚に達している。

すると、ゲームが始まった。教諭はカードを一枚抜き出す。いったん顔を伏せた幼児が覚えていた漢字を当てるという形式だ。先を争うように手を挙げる。

同園の小泉敏男園長(56)は「一見、難しく見えるかもしれないが、幼児の吸収力は大人の想像力を超えている。言葉の意味が分からなくても、繰り返すことで体に入っていく」と話す。

漢字や古典を重視する同様の教育は、千葉県我孫子市の私立「布佐台幼稚園」でも取り入れられている。

「牛若丸は、ひらりと橋の欄干に飛び乗ります。『えいっ』」。5歳の園児らは、昔話の『牛若丸』を指で文字をなぞりながら口ずさむ。平仮名だらけの市販の絵

本とは違い、漢字仮名交じり文だ。

両園では、漢字教育を実践した故・石井勲氏が設立した「石井式国語教育研究会」(東京都渋谷区)の教育システムを導入。「読み先習」を重視した漢字教育を行っている。

漢字カードを使い、クイズを出すゲームも採用。昔話、古典、良質な詩の復唱やカード遊びの繰り返しで、自然に漢字を身に付けさせている。

国立教育政策研究所が平成18年に公表した調査で、漢字の読み書きは、小学生で日常や学校生活で使う頻度が多い漢字の正答率が高いものの、「子孫」を「こまご」と誤答するなど、苦手な漢字がある実態が分かった。また学年が進むにつれ「漢字の勉強が好き」と答える割合が減少した。

布佐台幼稚園に次男(6)が通う母親の杉田巳樹子さん(39)は「私が知らない言葉を覚えて意味を聞いてくるので、必死で調べている。入園するまでは読書好きではなかったが変わった。刺激になっていたようだ」と話す。

23年度から完全実施される小学校の新学期指導要領では古典を重視。1〜2年で昔話や伝説の読み聞かせ、3〜4年で俳句や短歌の音読・暗唱、5〜6年で論語や古文、漢詩などの音読を実施する。

中村孝一・常葉学園大准教授(国語教育学)は「カタカナばかりの生活環境で子供の関心は外国に向いている。日本の先人の考えに親しむ機会が少ない」として、「かるた」や百人一首などで古典に親しませることは大切だ」とする。

布佐台幼稚園の水野克己副園長(45)も「論語や短歌、俳句などの美しい日本語を身に付ければ自然と美しい心が生まれるはずだ」と古典の効用を訴える。

「自らの国の古典を知らずして叡智ある21世紀の国際人たりえない」。いずみ幼稚園では、素読を終えると常にこの言葉を唱和して締めくくっている。

古典